

## 平成27年度公立高等学校入学者選抜学校独自検査

# 問題例

筆答検査 A ( p 1 ~ 3 )

筆答検査 B ( p 4 ~ 7 )

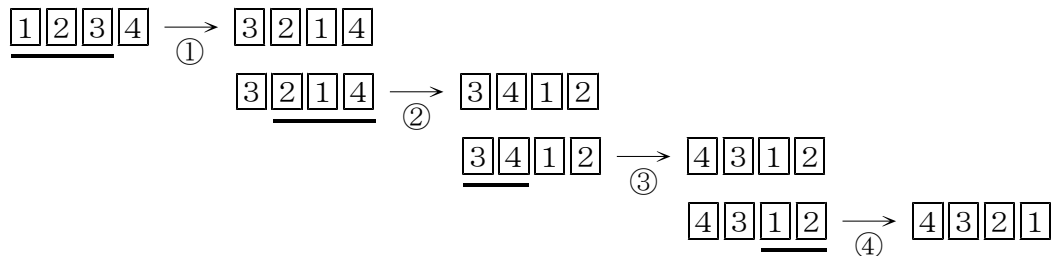
- 学校独自検査のうち、筆答検査 A 及び筆答検査 B のイメージをつかんでいただくために公表するものですので、解答例は示しません。
- 平成27年度公立高等学校一般選抜における出題の形式や問題の構成等は、必ずしもこの問題例に限定されるものではありません。
- この問題例に対する御意見、御質問（解答例についてのお問い合わせを含みます。）等については、今後の問題作成の参考とさせていただきますが、回答はいたしません。

新潟県教育委員会

- [1] 1から $n$ までの数が書かれた $n$ 枚のカード①, ②, …, ③がある。はじめに, これらのカードを, 書かれた数の小さい順に左から並べる。これに次のような〈操作〉を何回か行って, 書かれた数が左から大きい順になるように, カードを並べ替える。 $n = 4$ のときの具体的な〈操作〉は, 下の《例》のようになり, 大きい順に並べ替えるための最小の〈操作〉の回数は4回である。このとき, 次の(1)~(3)の問いに答えなさい。ただし,  $n$ は2以上の整数とする。

〈操作〉 連続して並んでいる2枚または3枚のカードを選ぶ。2枚選んだ場合はその2枚のカードを入れ替え, 3枚選んだ場合はその左端と右端のカードを入れ替える。

《例》  $n = 4$ のときの具体的な〈操作〉



下線部分は選んだカードを表している。また, ①~④は, それぞれ1~4回目の〈操作〉を表している。

- (1)  $n = 5$ のとき, 上の《例》にならって, 最小の〈操作〉の回数になるように, 具体的な〈操作〉を示しなさい。
- (2)  $n$ が4以上の偶数のとき, 連続して並んでいる3枚のカードを選び, その左端と右端のカードを入れ替える〈操作〉だけを何回行っても, 大きい順に並べ替えることができない。その理由を説明しなさい。
- (3) 200回以下の〈操作〉で大きい順に並べ替えることができるようなカードの枚数 $n$ のうち, 最大の $n$ の値を求めなさい。

[2] 次の英文を読んで、あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。

There was once a Japanese man who showed great interest in learning. His name was Minakata Kumagusu. He was full of curiosity and was always looking for knowledge. He went to foreign countries, met interesting people, and learned many things. He studied biology, folklore, and ecology. He thought the natural environment was important for our life. He was always interested in things around him.

Minakata was born in Wakayama in 1867. When he was a child, he liked reading books. There were not many books in his house, so he often went to his friend's house to read books. He memorized the words and sentences from the books in his friend's house. On his way back home, he repeated them aloud. After he came home, he wrote them down on sheets of paper and read them again. This was Minakata's way of learning.

Minakata was interested in science when he was young, so he read many books about science. One day, Minakata had a chance to read a famous encyclopedia called *Wakansansaizue* at his friend's house. It was written in the *Edo* period. He borrowed the book and wrote everything in the encyclopedia in his notebooks. He needed 5 years to finish this work. He also showed great interest in a science book written in English. He wanted to understand the book, so he read the book by using an English dictionary.

In 1883, Minakata went to Tokyo. The next year, he studied at a school in Tokyo and he read a lot of books in libraries. He also visited the museum and the zoo. He often went plant collecting, too.

In 1886, he went to America and the next year he entered a college. He studied at the college and enjoyed walking in the forests and looking at flowers and animals. When he was in America, he became more interested in flowers, plants, and fungi. He often went to the college library and read many books about them.

In 1892, he went to the UK to study. When he had time, he went to the British Museum, read many kinds of books, and wrote the sentences from the books in his notebooks. He used 53 notebooks for writing and they were like his own dictionaries. Now, all the notebooks are shown in his museum in Wakayama.

When he was in London, he was reading a science magazine called *Nature*. In the magazine he found some interesting questions. They were questions about

constellations that no one could answer. He wanted to answer them. So he wrote for the magazine. When his answers were printed, people were very surprised by his excellent answers written in English. People were also very surprised by his wide knowledge. He became very famous in London.

Today, there are many Japanese people who read the science magazine and write for it. But when Minakata was in London, there were not many Japanese who could write about science theses in good English. He wrote many other theses for the magazine. In fact, he wrote 50 times for *Nature* and 323 times for another one. People in London were very impressed by Minakata's theses.

After Minakata came back to Japan, he continued to write about science and study other things.

Minakata Kumagusu was a great naturalist and folklorist. He always wanted to know things that he didn't know. We can learn something from his way of learning.

(注) show great interest in ~ ~に大いに興味を示す be full of ~ ~で満たされている

curiosity 好奇心 biology 生物学 folklore 民俗学 ecology 生態学

memorize ~ ~を記憶する repeat ~ aloud ~を声に出して繰り返す

encyclopedia 百科事典 *Wakansansaizue* 和漢三才図会 the *Edo* period 江戸時代

go plant collecting 植物採集に行く fungi (fungus の複数形) 菌類 the UK イギリス

the British Museum 大英博物館 *Nature* ネイチャー (イギリスの科学誌)

constellations 星座 no one ~ 誰も~ない theses (thesis の複数形) 論文

impressed 感動した naturalist 博物学者 folklorist 民俗学者

- (1) 子どもの頃の、南方 (Minakata) の学習方法を、具体的に日本語で書きなさい。
- (2) 南方が、アメリカやイギリスで取り組んだことを、具体的に日本語で書きなさい。
- (3) あなたが、新しく何かを学ぼうとするときに大事だと思うことを、英文で書きなさい。

〔問〕 次の文章を読んで、解答用紙にある(1)、(2)の問いに答えなさい。

住居の構造や空間構成に見られる日本とヨーロッパの違いは、住まい方、すなわち日常の生活様式や行動規範にもそのまま反映している。興味深い例のひとつとして、自然に対する接し方の相違を挙げることができるであろう。

日本人は自然の美しさを愛する民族としてよく知られているが、西欧世界においても例えば華麗な花の美を愛好することは、恋人に花束を贈ったり、婚姻、葬送の儀礼の場を花で飾ったりする習慣が一般的であることから明らかである。日常生活においても、住居の雰囲気盛り上げるために、人びとはさまざまな花を利用した。十七世紀のオランダでチューリップの栽培が異常なまでの人気を集めたのは、投機という動機があったにせよ、花の美しさに対する愛好が広まっていたことを物語っている。だが、そこで愛好される花々は、いずれも自然の環境から切り離された切花である。外部から遮断された室内で花を鑑賞するためにはそうするより他に仕方がないのは当然だが、日本では年中行事となっている春の花見、秋の紅葉狩りのように、自然のなかに出かけて行ってその美しさを楽しむという習慣は見られない。そのことは、美術作品のなかにも明瞭に見て取れる。

西欧の絵画史において静物画というジャンルが明確なかたちで登場するのは、いち早く市民社会を成立させた十七世紀のオランダにおいてであるが、その静物画のなかでも花の絵は特に好まれ、もっぱら花ばかり描く専門の画家が多く輩出されたほどである。市民たちは、その描かれた花を壁にかけて生活を豊かに飾り立てたのである。同じ頃、日本においても、琳派の画家たちが屏風や襖に華麗な草花図を描き出していた。多彩華麗な花の絵で生活空間を飾るという点では、両者まったく同じである。しかしオランダの花の絵は、例外なしに花瓶に生けられたものである。それに対して、琳派の草花図は、池のなかに咲き誇る燕子花や生垣にまわりつく朝顔、あるいは雨に打たれる百合などのように、いずれも自然のなかの花である。現実の世界とは違って、絵の上でならどんな状態の花も描けるはずなのに、西欧と日本ではこれだけ際立った対照をみせるということは、自然感情の違いを明白に示すものと言ってよいであろう。

十七世紀のオランダにおいては、新しいジャンルとして都市風景も数多く描かれた。フェルメールの名作「デルフト眺望」のような町全体の眺めを描いたものから、著名な教会堂の外観や内部、あるいは大勢の人びとの集まる市場、広場などの情景である。この傾向は、ヨーロッパの他の諸国にも広まり、カナレットやグワルディのヴェネツィア風景のように、観光客に人気のある都市の景観を描き出した多くの作品が生まれた。それらは、市民たちに愛好されたと同時に、ちょうど今日の名所絵葉書のように、旅行者たちの土産物として広く流通した。描かれる主題は、これも現在の絵葉書と同じく、宮殿、教会堂、記念碑などの人工のモニュメントである。

ところが同じように観光土産として大量に作られた広重の『名所江戸百景』のシリーズを見てみると、建造物は主役としてはほとんど登場していない。描

き出されるのは、<sup>かめいど</sup>亀戸の梅屋敷や藤棚、<sup>はなしょうぶ</sup>堀切の花菖蒲、<sup>せんだぎ</sup>千駄木の桜、その他もっぱら自然の情景である。当時すでに百万都市であった江戸においても、人びとの眼は何よりも自然に向けられていたのである。

自然との結びつきという点では、日本の建築そのものが構造的に自然に向かって開かれている。建物の内部と外部が連続しているため、しばしばその間の境界が曖昧となり、内部とも外部ともつかない、いわば中間領域とでも言うべき場所が生まれてくる。軒下と呼ばれる部分などその代表的なものである。

日本の伊勢神宮とアテネのアクロポリスの丘にあるパルテノンの神殿とは、外観上よく似た形状を見せている。もちろん、一方は木造で他方は石造という素材の違いがあるし、スケールの上でも大きな差があるが、柱を主要な支持材としてその上に横材をわたし、三角形の断面を見せる切妻型の屋根をかけるという構造は基本的に同一であり、したがって形状も似たようなものとなる。だがそこには、ひとつだけ大きな違いがある。パルテノン神殿の屋根は建物の平面を覆うところで終わっているが、伊勢神宮の場合、軒先がさらに大きくのびている点である。その結果、ギリシア神殿には見られない軒下という空間が生じる。このことは、伊勢神宮だけに限らず、一般に日本建築の大きな特徴である（中国の建物にも軒下部分があるが、日本の場合ほど深くはない）。

このことは、日本には雨が多いという風土的特性に由来するものであろうが、そのようにして生まれてきたこの空間が内部か外部かという点、そのあたりが微妙なのである。それは家の中から見れば一応外部空間ということになるであろうが、そこが物置代わりに使われていたりするのを外から見れば、むしろ内部空間に付属するものとして捉えられる。現に、庭師たちは、軒下のことを「<sup>のきうち</sup>軒内」と呼ぶ。外部空間で働く庭師たちにとっては、それは内部に属するものなのである。

このような中間領域として、他にも例えば<sup>ぬ</sup>濡れ縁、渡り廊下のようなものがある。壁という強固な物理的遮蔽物によって内部と外部を明確に区分する西欧建築とは違って、日本の建築では、これらの中間領域を媒介として、内部は自然に外部へつながっているのである。

ところが、はなはだ興味深いことに、このように内部と外部が連続している空間のなかに住みながら、それにもかかわらず——というよりもむしろ、それであるからこそ——日本人は住まい方において、内と外とを厳しく区別するという行動様式を示す。最もはっきりしたその現われは、家の中にはいる時には靴（または<sup>げた</sup>下駄でも草履でも同じことだが）を脱ぐという習慣である。今日のように鉄筋コンクリートのマンションに椅子とテーブルの生活という洋式を採用しているところでも、まずほとんどの日本人はこの風習を守り続けているであろう。もちろん、西欧社会でも、家に帰れば内履きにはきかえるということとはよくあるが、それは私的な環境でくつろぐためであって、例えばお客を迎える時はきちんと靴をはき、客も靴のまま家の中にはいって少しも怪しまない。だが日本ではお客に対しても靴を脱ぐことを当然のこととして要求するので、慣れない外国人は当惑するということになる。空間構造はつながっているよう

に見えながら、行動様式では内と外は明確に区別されているのである。

このことは、間仕切りの曖昧な家の中においても同じである。お客に対して、靴の代わりに室内用のスリッパを提供するというのは、今ではごく普通に行われている。だがそのスリッパも、板の間や廊下ならよいが、畳の座敷に上がる時は再び脱がされる。というよりも、普通の日本人なら、スリッパのまま畳の部屋にはいることには、大きな抵抗感があるであろう。あるいは、たいていの家では、便所にはまた別の専用のスリッパがあつて、そこでまたはきかえるということになる。日本人にとっては、それはごく当たり前のことだが、西洋人にはそのような感覚がないから、便所のスリッパのまま畳の部屋にはいりこんで主人をあわてさせたりするのである。

このような家の内と外、部屋の内と外の区別は、物理的というよりもむしろ心理的なものである。つまりそれは、意識の問題であり、価値観の問題である。

どの社会にも、聖なる空間を大切に<sup>そうごん</sup>する習慣があつて、そのために立派な教会堂や荘厳な神社が建てられる。だが西欧の教会建築は壁によって内外の区別がはっきりしており、壁の内部は聖なる場所で、壁の外は俗世間ということがかたちの上でも明確だが、日本の神社で聖なる空間を示すものは、物理的には境界として何の役にも立たない鳥居である。つまり一步鳥居をくぐれば神の空間であるというものは、もっぱらわれわれの意識の問題なのである。

似たような例として、お寺や日本式料亭の庭の飛石の上に、時に、十文字に縄をかけた小さな石が置かれていることがある。これは関守石と呼ばれるもので、ここから先は立入禁止というしるしである。だがこれも、その気になれば簡単にまたいでいけるもので、物理的には何の障<sup>しょうがい</sup>碍にもならない。関守石の存在によって空間が区別されるのは、われわれの意識のなかにおいてである。

このように、眼に見えないかたちで内外の区別が成立するためには、鳥居や関守石の意味についての共通の理解を前提とする。その共通の理解を持った集団、ないしは共同体が日本人にとっては「身内」であり「仲間」であつて、その外にいる者は「よそ者」ということになる。日本の家がしばしば「うち」と呼ばれるように、家族は「身内」の代表的なものであるが、時と場合によっては、それは地域社会であつたり職場の組織であつたりする。サラリーマンが「うちの会社」と言う時は、会社全体が「身内」である。つまり「身内」は、ある関係性のなかで成立するもので、そのことが、日本人の行動様式を外国人にわかりにくいものにしていてよいであろう。関係性は時によって変わるものだからである。

空間的な内部を意味する「うち」という言葉が「身内」のように人間同士の関係性を意味したり、あるいは「朝のうちに仕事をする」という具合に、時間的広がりにも用いられたりすることから明らかのように、日本人にとっては人間社会も空間も時間も関係性という共通した編み目のなかに組み入れられている。同じひとつの部屋が、外から人が来れば客間になり、夜になれば寝室となるというのは、住居の空間もまた、人間や時間との関係で意味を変えることを物語っているであろう。

平成27年度公立高等学校入学者選抜  
「筆答検査B」問題例

日本人は、そのような関係性の広がりをも、「間」という言葉で呼んだ。「間」とは「広間」「客間」のように空間の広がりでもあり、「昼間」「晴れ間」のように時間的広がりでもあり、また「仲間」のように人間関係の広がりでもある。読み方はさまざまだが、「空間」も「人間」も、そして「世間」も、いずれも「間」という文字を含んでいるのは、決して偶然ではない。そのような関係、つまり「間合い」を正しく見定めることが、日本人の行動様式の大きな原理である。その計測を誤ると「間が悪い」ことになり、「間違い」をおかすことになる。現在、われわれの生活様式は大きく変わりつつあるとはいえ、この「間」の感覚はなお日本人のあいだに生き続けており、住居の構造や住まい方をも規定している。それはおそらく、日本人の美意識や倫理とも深く結びついているもので、その本質と構造を解明することが日本の文化を理解する大きな鍵となるであろう。

(高階 秀爾 「西洋の眼 日本の眼」による)

(注) 投機＝不確定だが、当たれば大きい利益をねらってする行為。

琳派＝江戸時代の絵画の一流派。

フェルメール＝オランダの画家。

デルフト＝オランダ南西部の都市。

カナレット＝イタリアの画家。

グッルディ＝イタリアの画家。

ヴェネツィア＝イタリア北東部、アドリア海に臨む港湾都市。

亀戸＝現在の東京都江東区の地名。

堀切＝現在の東京都葛飾区かつしかの地名。

千駄木＝現在の東京都文京区の地名。

アクロポリス＝ギリシア語で城山の意。

遮蔽物＝おおいさえぎる役目をするもの。

- (1) 西欧と日本の「自然感情の違い」とはどのようなものか。文章全体を踏まえて、具体的に200字以内で説明しなさい。
- (2) 日本の「『間』の感覚」を外国の人に説明するとしたら、どのように説明しますか。本文以外の具体例を用いて100字以内で書きなさい。